Japanese Association of Educational Psychology

The Annual Report of Educational Psychology in Japan
2002, Vol. 41, 30-33

研究委員会企画シンポジウム　1

心理学者教育の在り方

企画者　森　敏昭（広島大学）
　　吉田寿夫（兵庫教育大学）
司会者　吉田寿夫（兵庫教育大学）
話題提供者　内田伸子（お茶の水女子大学）
　　坂元　章（お茶の水女子大学）
　　下山晴彦（東京大学）
　　村井潤一郎（文京女子大学）
指定討論者　松田文子（広島大学）
　　村上　隆（名古屋大学）

企画の趣旨

吉田　寿夫

最近の我が国の心理学界においては，“ジャーナルの審査に通りやすい，型にはまった，無難な内容の論文が横行し，人間についての深い理解や実践などに対する意義が強く認められる研究，おもしろい研究，夢のある研究がほとんど見受けられない”という寂しい事態がしばしば指摘されてきた。このような憂うべき現状を鑑みると，これからの教育心理学会の重要な課題の1つは学術水準を引き上げることであり，そのためには我々の教育実践の現場である心理学者教育の在り方について一度問い直しをしてみる必要があると考えられる。

また，学者やなんらかの学問をベースにした実践家という者は常に生涯学習を心がける必要性が極めて高い職業だと考えられる。したがって，大学院などでの公の教育を受けることを終え，（現在は心理学者教育に直接携わっていない立場で）一端の研究者や実践家として活動している者にとっても，上記のようなことについて省察することは有意義であろう。さらに，上記のような事柄について省察することは，（心理学者教育に限らない）教育一般の問題についての我々のスタンスにも多くの示唆を与えてくれるものと期待される。

女性研究者の養成には“準備”が必要

内田　伸子

0．なぜ女子大か？；女性研究者の就職の壁は高く厳しい。共学大学では「社会的慣習と男性教員を背景にした男子学生と彼らに迎合する女子学生に抑えられがち」な状況とは無縁に，女性のライフコースに合わせた学びが許容され易く，博士号取得までを課題志向的に過ごし易い環境にある。教師も女性研究者養成に中心化し易い。

1．準備は学部教育から始まる；研究には職人的な技能の習得が不可欠。方法論（実験法や統計的方法の手続き的知識 Knowing how の習得）と内容（概論や特殊講義による宣言的知識 Knowing that の習得）をつなぐ演習（批判的な討論や異議申し立て方の習得）の3本柱のもとに構成された専門基礎教育を土台にし，各自の興味を凝縮させ，教師と二人三脚で各人の興味を研究テーマにまで収束させ，論文をしあげさせ学会誌に投稿させる。

2．時間は有限である；博士号取得の時期の目標にあわせてタイムスケジュール（学術振興会研究員への準備と博論の準備を兼ねて学会誌論文3本＋αの印刷と研究5，6本を原資にして5年目の夏には博論の作成に取りかかる）のもとに各自の生活状況と対応させて活動計画を立てさせる。この間は個人・集団での論文指導を密に行う。

3．深い穴を掘るためには広い面積を耕さねばならない；幅広い心理学の知識の習得と専門知識の習得のために，・自分自身で学ぶ，・学内外の研究会で学ぶ，・「ランチトーク」でプレゼンテーションと批判的思考力を養う，・修士・博士課程の院生合同の研究指導ゼミ，・個人指導は随時，の5つを通して内容と方法の基礎を習得。

4．研究の進め方；先行知見に問題を発見したら自分なりの問題関心と摺り合わせ予備実験を繰り返させ，データと対話する。論文は問題を考え始めたときから書き始める。研究論文に仕上げるまでに，この過程を繰り返す。この過程は個人内で，院生仲間との自主ゼミで，さらに，教師との二人三脚で凝縮させていく。この間モードIIの種を播き，面白さへのセンスを奨励するのは教師の役割。

5．難題山積のライフコースへの見通しをもつ；女性の利点を活かし弱点を克服するために，結婚・出産・子育て・老いを看取る・更年期障害など難題山積の現実について自覚し，見通しと準備が不可欠。就職機会の性差にどう対応するかは私にとっての目下の課題である。

6．よい発達研究者になるための5箇条；・知的好奇心が旺盛であること・野心的であること・執拗であること・楽天的であること・生きとし生けるものへの愛をもて。“真に得たいと思うもののために失うものを惜しむな”よい研究者・女性研究者を育てるためには教員

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

同士のチームワーク，連携と協力は不可欠の要件となる。

ゼミ内共同研究による心理学者教育

坂元　章

最近のモード論では，知的生産の様式に2つがあるとされる。1つはモードIであり，研究の価値が学問領域に対する貢献によって決定され，それゆえ，研究の内容がその領域のディシプリンに強く規定される。もう1つはモードIIであり，研究の価値が社会問題の解決に寄与するかどうかで決定される。

従来から現在までの学問の主流はモードIであり，これは心理学も例外ではない。最近では，心理学に対する社会からの要請が強まっており，そのため，モードIIの研究が必要とされている。これは同時に，心理学者の教育においても，モードIIの仕事ができる人材の養成が必要であることを意味する。

モードII研究ができる心理学研究者には，従来的な心理学研究者と比べて，少なくとも次の要素が重要である。第1に，社会問題の解決に対する志向性を持っていること。第2に，さまざまなテーマに取り組める柔軟性を持っていること。第3に，他の研究者と生産的な協働ができること。第4に，多くの方法論に精通していること。第5に，少ない時間で研究成果を挙げられること。今後の心理学者教育においては，心理学の基本的，発展的な知識や技能の習得に加え，これらの点を高める工夫がより望まれるように思われる。

私の研究室では，1997年から現在まで，インターネットの心理的影響に関する，ゼミ内共同研究プロジェクトを行ってきた。先行研究の輪読と実証研究の実施からなるものであるが，これまでに1冊の書物，審査論文15本を含む多数の論文を出し，40回以上の学会発表を行うとともに，4年にわたる雑誌連載を続けてきた。このプロジェクトはもちろん，1つには研究を目的としたものであるが，教育の目的もあった。とくに上で挙げた要素の向上を目指したものであった。

このプロジェクトを実践してみて，方法論の習熟と，少ない時間で成果を挙げることについては，とくにその効果があったように思われる。しかし一方で，こうしたモードII研究の訓練は，モードI研究に従事する時間を学生から奪ってしまうという問題がある。現在では，モードI研究で成果を挙げるほうが学界で評価されやすく，それを阻害することは学生に不利になると考えられる。しかし，モードIIの素養を持つことも重要であるように思われ，どのようなバランスでモードIとモードIIの訓練に取り組んでいくべきかについて，いつも悩んでいる。

心理学の実践専門家の養成の立場から

下山　晴彦

心理学者の教育の在り方を考えるにあたって最も重要なことは，教育の目的は何かを明確にすることである。かつては，「心についての科学的研究をすること」が心理学の専門教育の目的であった。しかし，21世紀の現在は，科学的であることが学問の唯一の目的ではない時代となっている。むしろ，社会に貢献できるということを示し，社会への説明責任を果たすことが心理学にも求められるようになっている。また，脳科学や神経科学が発展し，疑似科学である心理学は時代遅れになりつつある。その点で，今後心理学が生き残っていくためには，改めて何のために心理学(者)が存在するのかという心理学の専門性を再構築し，それに基づいたカリキュラムを構成していくことが必要となる。特に社会的貢献という点では，心理学の実践的専門性が，科学的専門性と並んで重視されるようになっている。教育心理学会において，学校心理学に注目し，「教育心理学研究」誌に実践研究の枠を設けたのも，このような心理学の実践的専門性を重視する流れの一環といえる。

臨床心理学は，専門性の核に実践性を置く心理学である。したがって，教育カリキュラムにおいては，実践技能の教育訓練プログラムが重要な位置を占める。臨床心理学の教育においては，当初心理療法などの実践活動(practice)が中心となっていたが，それに加えて研究活動(research)が重要な意味をもつようになり，さらに社会的な活動として認知されるにしたがって専門活動(profession)の側面が充実してきた。専門活動とは，臨床心理学の活動が専門的な役割と機能を備えた社会制度として位置づけられるための活動である。実践活動，研究活動，専門活動の知識と技能を修士課程の2年間のみで習得させることは不可能であるので，専門性の発達段階を前提として，学部教育，修士課程2年間の専門教育，修士卒後教育といった長期の体系的教育プログラムを構成してきている。

心理学者の教育を考えるにあたっては，科学的心理学の教育だけでなく，このような実践的心理学の教育も重視し，心理学全体が発展するような教育体制とカリキュラムを整える必要がある。そのためには，心理学の多様な在り方を認め，それぞれの専門領域が協働(コラボレーション)して，多様な教育方法を開発していくことが必要となる。ところが，日本の心理学にあっては，アカデミックな心理学と臨床心理学との間で深刻な対立が生じている。これは，21世紀に向けての心理学教育を構想するための土台そのものが揺らいでいる危機的な事態である。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

型にはまる・型を破る

村井　潤一郎

「型にはまった無難な論文の横行」を嘆く声がある。しかしながら，心理学者として生きていくための第一歩は，型にはまった論文を執筆することである。

型にはまるための，最も効果的な実践は，学生に研究者の活動を模倣させること，つまり，市川伸一氏の言うResearcher-Like Activityである。東京大学の市川ゼミでは，査読とレビューを行っている。査読ゼミでは，参加者は，自分の担当する回に，自分が選定した論文について「査読コメント」を書いてくる。ゼミでは，それをもとに討論する。重要なことは，査読者になりきって査読コメントを書くことだと思う。そうでないと，単なる感想を執筆することになりかねない。また，査読コメントには本人の実力が現れる。その仕上がり具合は，論文を読みこなす能力のバロメーターである。一方，レビューのゼミでは，参加者は，あるテーマについてレビューをし，最終的に「小講演」を行い，その成果を発表する。発表の様子は録画され，各自それを見て反省する。プレゼンテーション能力は，研究者が教育活動を行う上で重要となる。その能力を向上させるためには，自分の映像に直面し，恥ずかしい思いをすることが効果的である(なお，上記の活動については，型に「はまる」という表現より，型を「学ぶ」という表現の方が適切であろう)。

以上のように基礎能力を養う実践を行う一方，型を破ることについても意識しておく必要があろう。査読ゼミでは，論文を批判的に読むわけだから，広く流布している手法に接しつつ，その手法に違和感を持つかもしれない。そうした感覚を大切にすべきである。何も査読ゼミでなくても，例えば統計法の講義等でも，何らかの違和感を持つかもしれない。統計的検定で「nが大きくなるほど有意になりやすい」と習ったとする。しかし，現実の論文の多くは，恣意的なnで研究を行い，その恣意的なnに大きく左右される検定結果で結論が変わってくる。ならばnを意図的に大きくすれば検証したいことが検証されてしまう，これはおかしいと思った学生がいたとする。こうした素朴な疑問こそが，本質的な点を突いていることがある。心理学の世界に浸かりきってしまう前に抱いた違和感を大切に持ち続けることが，後に型を破るためのエネルギーの源泉となる。しかし，その一方で，ひとまず検定を用いて「普通に」論文を書くことも，大学院生にとって重要なのである。就職難のご時世，大学院生は高度の不安を抱えている。その不安を軽減するものが業績である。ひとまず大勢に従うのがよい。しかし決して反逆精神を忘れないことである。

型にはまった論文が発表されつつも，型を破った論文が発表され，それらを相互比較しながら，新しい型を創っていく，こうした作業が学界全体で同時並行的になされてこそ，心理学研究は充実していくのである。

おもしろくない論文に暖かく厳しいまなざしを！

松田　文子

このシンポジュウムの企画の主旨は，ジャーナルの審査に通りやすい，型にはまった，無難な内容の論文が横行し，人間についての深い理解や実践などに対する意義が強く認められる研究，おもしろい研究，夢のある研究がほとんどみられないという憂うべき現状を脱するために，心理学者教育を考え直そうということであった。しかしいったいいつ，そんなにおもしろくて意義深くて，夢のある論文が輩出した時代があったというのだろう。それはともかく，もしそのような印象が最近特に強くもたれるようになったとしたら，その原因は大きく2つあり，そのことは心理学者教育の在り方と直接的に関わっていると考える。

1つは，ここ10年間，特に最近の5年間に博士課程に在籍する学生が急増したことである。さらに課程博士の取得への圧力も格段に強まっている。学位取得のためには2－3本の審査論文が必要なのが普通で，内田先生の指導計画のように，院生も指導教官もそのために非常なエネルギーを注いでいる。私が院生であった60年代の後半，大学院の院生が論文を投稿するというのは，むしろまれであった。これは何を意味するかというと，論文投稿者の質，論文投稿の意味が，40年前はおろか10年前とも大変変わってきたということである。心理学者教育を考えるとき，「おもしろくない」と切って捨てるのではなく，村井先生のいわれる「型にはまる・型を破る」をどう援助するか，という視点も，論文査読者や読者に期待したい。

2つ目は，論文を書く層は広くなり，若い方にシフトしたにもかかわらず，論文の質への期待はむしろ高くなり多様になっていることである。坂元先生もご指摘のように，社会的貢献ということが，研究にかなり直接的に求められるようになってきた。もちろん科学論文であるから，従来どおり，論理的説得性が重要であることはいうまでもない。また，心理学の研究が，whenとwhatを述べれば新しい現象として面白がられていた時代は終わり，howとwhyを明らかにしなければ評価されなくなってきている。論文を読む側のこのような研究への期待の高さと多様性が，「物足りない」という印象を生みがちであると思われる。このことも心理学者教育の在り方を考えるときに，忘れてはならないことであろう。

現在は，若い心理学者の卵が，大学院5年間で学位を

NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology

取り心理学者のスタートラインに立てるように，きっちり援助教育を行わなければならない時代である。すでに心理学者になっている人すべてに，暖かくも厳しい援助の目を期待したい。

育ちに関する研究が必要

村上　隆

指定討論者として私が申し上げようとしていたことは，ほぼすべて，松田文子氏によってより徹底した形で論じられてしまったので，勝手ながらここでは，シンポジウムの終了後に考えたことを，若干書き連ねたい。

現時点で「心理学者を育てる」ことを考えるとき，高等教育のあらゆる意味における拡大ということを視野に入れなければならないと考える。たとえば，「心理学者」というものが，ほぼ大学における研究者と同義であり，その養成が博士課程を持つ少数の大学によって独占されていた時代には，「育ち」の道筋もゴールも比較的良く見えていたと思われる。それでもなお，「育て方」については，さまざまな可能性がありえたし，論じるべきことも多々あった。だいたい，このシンポジウムの議論はその範囲にあったように思う。

しかしながら，今や（広い意味での）心理学専攻の大学院生の数は，かつてとは比較にならぬほど増え，その進路も多様になった。いや，むしろ，そうしない限り大学院出身者の雇用を確保できなくなったというのが正しいであろう。話を大学への就職に限定したとしても，これだけ（能力の面でもニーズの面でも）幅の広い学部学生を抱えざるを得なくなった高等教育全体に向けて，単一の（要するに旧来の意味の）大学教員を養成し続ければよいのかどうかは，大いに疑問であろう。要するに，今や事態は，従来型の研究者である大部分の大学教員にとって未知の領域に突入したのである。

実際，「現場」は混乱しており，大学院生は昔よりも大きなストレスと不安を抱えることになっているように思える。この難局を，従来型の徒弟制度的後継者養成のノウハウを強化し改善することだけで乗り切ることはできないであろう。

このシンポジウムの企画趣旨とは異なるであろうが，むしろ，この問題を「研究」として取り上げる必要があると考える。たとえば，就職前後の若手研究者の実態を偏りなく反映するような調査，特に，大学以外のところに職を見出した人たちの，大学の研究・教育の現状に対する評価を知ることは，研究の出発点として大いに意味があるであろう。筆者としては，こうした研究が，研究者自身の成長過程と，研究テーマの推移，研究者自身の経験がテーマ選択に与える影響といったことを明らかにすることを期待したい。その結果は，若い人たちの進路選択やアイデンティティ形成にも役立つであろう。

迂遠なようだが，こうした研究が，結局は企画者のおっしゃる「面白い研究」を可能にする条件を創生する早道なのではないだろうか。

「まとめ」にかえて

森　敏昭

日本教育心理学会は7千名の学会員を擁する大きな学会となり，会員の職域も大学の研究者だけでなく，小中高の教師にまで広がった。したがって，本学会が今後さらに発展するためには，アカデミズムと実践の相克の中で，学術水準を引き上げると同時に教育実践への貢献を目指すという，きわどいバランス感覚が求められるであろう。また，そのような時代の要請に応えることのできる教育心理学者を養成するためには，従来の教育心理学者教育の在り方を根本から問い直すことが必要になるであろう。その意味では，本シンポジウムは時宜にかなった企画であり，これからの教育心理学者教育の在り方を考える上で参考になる，いくつかの重要な示唆が得られたのではないだろうか。

第1に，大学・短大に所属している学会員は，自分自身が「心理学教育」および「心理学者教育」の実践者であることをもっと強く自覚し，自らの教育実践を省察・改善する努力を重ねるべきであろう。教育実践というと，ともすれば小中高の教育実践だけをイメージしがちであるが，大学教育も重要な教育実践であることを決して忘れてはならないのである。

第2に，一人ひとりが自らの教育実践を改善するだけでなく，複数の教師による協同授業の実践も効果的な心理学者教育法となるのではないだろうか。参考までに筆者のささやかな試みを紹介してみよう。筆者は同僚の松田文子・湯澤正通氏との合同ゼミ（大学院生対象）を既に5年以上実践している。この合同ゼミは教育心理学関係の洋書を講読・討議する演習で，内容的には特に目新しい趣向があるわけではない。しかし，受講生の専攻分野が教育心理学だけでなく，教育学，教科教育学など多岐にわたっているため，複眼的思考力を育成する効果があるようである。また，筆者のゼミと秋田喜代美氏のゼミをMLで結び，協働での翻訳プロジェクトを実践中である。この遠隔コラボレーションの実践も，普段は顔を合わせることのできない遠隔地の院生同士がネット上で交流し，お互いによい刺激を受けているようである。

NII-Electronic Library Service